

学生の学びとキャリア観を深めるインターンシップの構築

創価大学キャリアセンター キャリア・就職支援課主任 馬渡 桂子

はじめに

本学キャリアセンターは「学生生活すべてがキャリアデザイン」をコンセプトに掲げ、二〇〇四年九月に新設された。今日まで、学生一人ひとりが自分の未来を、自分の力で切り拓く力をつけ、自身の基盤を築くことを目的に、一年次から四年次まで各学年を対象にキャリア科目を提供し、キャリアデザインをサポートする課外イベントなどを実施している。二〇〇六年度よりインターンシップを「キャリア教育科目」に位置付け、早い時期に就業体験を通して自身の適性を知り、就業意識を養うことを目的に、とりわけ一・二年次のインターンシップの推進に力を入れている。

二〇一八年に中央教育審議会が発表した「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」には、「学修者が自らを社会の一員として自覚し、自らの学びの社会的意味を理解し、学修の質を向上させる機会とし、インターンシップの学びを振り返り、今後の学生生活の目標を設定した後、単位が付与される。」

インターンシップの目的・目標を具体化する

以上が本プログラムの概要である。

本学では、学生がインターンシップを通して多くの学び、気づきを得ることで充実した学生生活、今後のキャリア観の育成につながるよう事前にインターンシップの目的・目標を具体化する機会を設けている。

学生が本プログラムに応募する理由は「働くとはどういうことか知りたい」「とにかくインターンシップを経験してみたい」「何か挑戦してみたい」など、抽象的な理由が多い。そこで、学生の目的・目標がより具体的になるように、事前に目標設定研修を実施し、目的・目標の設定の仕方について学ぶ機会を提供している。

学生は研修受講後にあらためてインターン



馬渡桂子（まわたり・けいこ）

創価大学卒業後、同大学キャリアセンターに入職。約8年間、単位認定型の大学紹介インターンシップの学生募集から選考、事前・事後研修の設計等に携わる。国家資格キャリアコンサルタント。

てのインターンシップの充実等が求められる。」とあり、インターンシップの必要性が示されている。

現在、就職活動の一環で行われている就業体験や社員の一人としてプロジェクトに参加できる長期インターンシップなど、インターンシップのあり方が多様化している中で、本学の「キャリア教育科目」の一つとして単位を修得することができる大学紹介インターンシップは、①社会が必要とされるスキルを学ぶ、②学生生活での学びが社会でどのように活かせるかを理解して、今後の学生生活の目標を設定する、③内的キャリアを深め、外的キャリアの幅を広げる——ことを目的に、学生の学びとキャリア観の深化に焦点をあてたプログラムになっている。

インターンシッププログラムの概要

先述した大学が実習先と学生の仲介を担う大学紹介インターンシッププログラムに、二〇一九年度は、六〇社の実習先と提携して

シップの目的・目標、それを実現するための行動計画を立てるとともに、本学が社会で必要とされるスキルとして定めている「SOKA Generic Skill」(以下、SGS)の中でインターンシップの経験を通して伸ばしたいスキルを考える。このSGSとは、「論理的思考力」「言語表現力」「数量的分析力」の三つのリテラシーと「対人基礎力」「討議推進力」「自己育成力」「課題設定力」「目標達成力」「創造的思考力」「環境変革力」の七つのコンピテンシーで構成されている。本学では、学生がSGSの中で自分の強み、弱みを客観的に理解した上で強化目標を設定できるよう一年次の後半に「SGSテスト」を実施し、四年次にも再度テストを受験することで学生生活を通して伸びたSGSを可視化している。

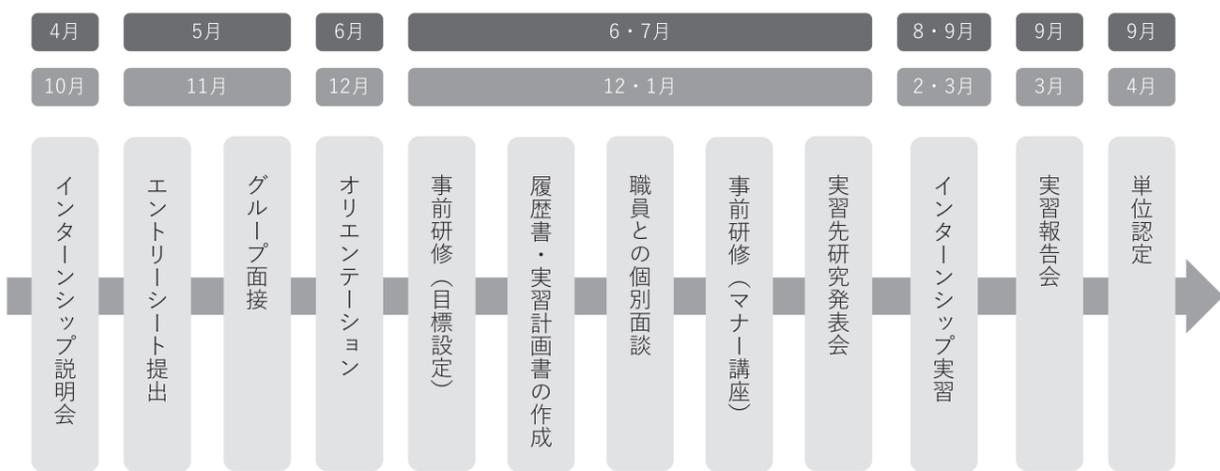
社会と接点をもつ大学紹介インターンシップは、自分のSGSの強み、弱みを深く理解することができる機会である。そのため、事前にSGSテストの結果をもとにインターンシップを通して伸ばしたいスキルを考え、設定した目標を実習中に意識して取り組むことを学生に促している。学生が自ら考えたインターンシップの目的・目標・行動計画・SGSの強化目標は、本学が作成した実習計画書にまとめて記入することによって、可視化できるようにになっている。これらの取組によって当初考えていた目的・目標をより具体的に

合計一三九名の学生が参加した。

本プログラムでは、長期休業期間で行われるインターンシップに向けて春学期、秋学期の各セメスターでプログラムの説明会、実習生の選考、事前・事後研修を行っている。

プログラムへの参加を希望する学生は、あらかじめインターンシップで学びたいこと、経験したいことをエントリーシートに記入し、提出することになっている。担当職員は提出されたエントリーシートに目を通しながら、志願者全員と面接を実施し、インターンシップへの意欲や希望する実習先への志望度など、総合的に判断して選考を行う。実習生が決定した後はオリエンテーションで、実習先に提出する履歴書の作成方法、実習先に電話をかける際のマナーなど、一つひとつの書類や所作について社会人の視点を意識して考える機会をもち、目標設定研修、ビジネスマナー研修、職員との個別面談、実習先研究発表会を経てインターンシップに参加する。インターンシップ終了後は実習報告会に参加

創価大学 大学紹介インターンシッププログラム概要



することが可能になり、加えて本学では学生が充実したインターンシップの機会にするため、キャリアコンサルタントなどのキャリア系の有資格者である職員と学生との一対一の時間の面談を実施している。

面談では学生が思い描くキャリアを開きながら、学生が設定したインターンシップの目的・目標の実現可能性、キャリア形成との関連性などを一緒に考え、より具体化していく。その他にも、実習先の事業内容や実習先で働いた場合に実現されると考えられる内的キャリア、実習先企業・業界に関する最新のニュースなどを調べ、プログラムに参加する学生同士でプレゼンテーションをする実習先研究発表会を設けている。

このように事前の段階であらゆる機会を通して、学生が設定する目的・目標の具体化を意識することで、学生からも「事前に自分と向き合うことで、インターンシップの目的や目標を整理することができ、実習の際も目標をもって取り組むことができた」との声が寄せられている。

PDCAサイクルで学びを深める

本プログラムは、五日間以上のインターンシップに一単位、十日間以上は二単位を認定するキャリア科目としているため、実習の受入れ先となる企業・団体に、必ず五日間以上のインターンシップを実施してもらうように依頼している。

インターンシップの内容は実習先が設計し、学生が考える時間を設ける。目に見えない自分自身の心の変化、キャリアについての考えの変化を可視化し、学生に気づいてもらうことによって、学生本人のキャリア観を深める機会にしている。その他、実習報告会では、長期間の学生生活の目標だけでなく「今後、半年間の目標」を考える時間を設け、インターンシップを通して設定した目標を、学生生活の中で実行に移すことも促している。

コロナ禍でのインターンシップの取組

昨年度のインターンシップは、コロナ禍でどのように実施するかについて、担当職員で検討を重ねた。前例のない状況であったが、海外でのプログラムが軒並み中止になる中、学生の学びの機会を一つでも多く創出したいと考え、事前・事後研修をすべてオンラインで実施することを決め、実習先に感染対策を講じた上で実施いただけるかヒアリングするところから始めた。結果としてインターンシップが中止になった実習先もあったが、感染対策をした上で対面実施を承諾いただいた実習先や、オンラインまたは対面とオンラインのハイブリッド形式に変更して実施いただいた実習先など、最終的に二五社が受け入れられ、六九名の学生がインターンシップに参加することができた。

担当職員も学生向けに感染対策における注意事項と実習中のチェックリストを作成し、学生には毎日チェックリストを必ず確認してインターンシップに参加することを徹底し

ているが、参加する学生は毎日、実習日誌を記入してインターンシップに参加することを習慣化している。実習日誌には実習開始前に一日の目標を記入し、実習終了後に一日を振り返り学んだこと、自分に対する評価、印象に残っている社員の言葉を記入し、日々の実習で感じたこと、学んだことを振り返る。この実習日誌は実習先の担当者が毎日確認し、学生が記入した内容と学生のインターンシップに取り組む様子に対してコメントもいただく。担当者からのコメントは、学生にとって普段の学生生活ではもらえないフィードバックであり、働く上で必要なスキルを理解し、自分を客観的に見つめ直す貴重な機会となっている。

この目標設定、実習、振り返り、担当者からのフィードバックというPDCAサイクルを繰り返すことにより、目標を設定して実行に移すことの習慣化や、経験の意味づけをすることによって学びを深めることが期待される。また、日々の学生生活での学びがどのように社会で活かしているのかを客観的に理解することによって大学での学びを新たな視点から深めることができる。

実際に学生からも「大学の授業で学んでいる分野と共通している部分をインターンシップの中で感じた。今後、学びを深めていきたい方向性も見えたので勉強に励みたい」「自分の弱みは論理的思考力であることに気づいたので、今後の学生生活の中で克服していきたい」との感想が寄せられている。今後、自

た。オンラインでのインターンシップは初めての試みだったが、参加した学生に実習内容に対する満足度を調査したところ、「満足」としても満足」と回答した学生が九二％という結果になったことから、オンラインでも学生の学びにつながることを実感した。大学としても今後のインターンシップの開催手法について、新たな可能性を考える機会になった。

また、海外経験の機会を少しでも学生に提供しようと考え、タンザニアとインドのNGOや企業と提携し、海外オンラインインターンシップを実施した。十日間、英語のみでインターンシップを行い、一九名の学生が参加した。インターンシップでは、現地とZoomで結んだ一〇名の学生が、タンザニアのNGOの活動について講義を受講し、現地の方にインタビューを行って女性や子供の人権に関する取組に対して改善策を検討・提案した。また、インドの企業とのインターンシップでは、九名の学生が起業をテーマにビジネスアイデアの考案に取り組み、アウトプットに挑戦した。今年度のインターンシップも実習先と密に連携をとりながら、学生の学びの機会を少しでも増やしていけるようにしていきたい。

おわりに

これまで学生の学びとキャリア観を深めるインターンシップを目指して試行錯誤を繰り返しながら設計を重ねてきたが、まだ不足している部分も多くあると実感している。大学

創価大学

本学は一九七一年、創立者池田大作先生が示された建学の精神のもと開学し本年創立五〇周年を迎えた。現在八学部一〇学科、五研究科、二専門職大学院へと発展し、あらゆる分野で新たな価値を創造してゆく「創造的人間」の育成に取り組んでいる。

分が伸ばしたいスキル、学んでいきたい分野が明確になった上で目標を設定することが、より充実した学生生活につながると感じている。

インターンシップの経験を振り返り自分のキャリア観を深める

インターンシップ終了後は、事後研修として実習生同士でインターンシップの学びを共有する実習報告会を実施している。各自で「インターンシップの目的・目標」「実習内容」「実習で学んだこと・気づいたこと」「今後の目標」を資料にまとめ、三人〜四人のグループ内で発表し合う。発表を聞いて気になったことは積極的に実習生同士で質問し合う時間も作り、学生に新たな気づきを得ってもらう時間としている。

実習報告会ではインターンシップでの学びを共有するだけでなく、「インターンシップを通して変化した自分の内的キャリア・外的キャリア」「インターンシップのどの経験が内的キャリア・外的キャリアに影響を与えたか」

教育の改革が進み、社会と接続した経験と学びの重要性が叫ばれる中で、本学としてインターンシップをどのように位置づけるか、議論を深める必要性を感じている。

また、学生、実習先、大学がより連携することで、学生の満足度が高いインターンシップを実施できると考えている。現在の本学と実習先とは、事前に学生の履歴書を共有し、インターンシップ中に学生が作成する実習日誌へのフィードバック、インターンシップ終了後に実習生の評価書類を作成いただいているが、実習先との連携はまだ改善の余地がある。さらに充実したインターンシップの設計を目標に、①事前に学生が作成した実習計画書を実習先にも共有し、学生・実習先・大学間で学生が設定した目的・目標の共通認識を高める、②インターンシップ終了後に学生が感じた学びや気づきを実習先にも共有し、今後のインターンシップの設計に活かしていく――ことに取り組んでいく。

インターンシップの事後研修を実施する度に、目に見えて変化している学生の姿に触れると、インターンシップが学生に与える影響は大きく、とても価値のある経験であることに実感する。社会も学生も年々変化しているからこそ、インターンシップの制度も、担当する職員自身も、変化し続けることが必要だと考える。今後も学外の情報交換の場を積極的に活用しながら、学生のさらなる成長につながるインターンシップの構築に尽力していきたい。